The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハーディのWessex 小説におけるキャラクタライゼーション : 文体意匠としての会話部
Author(s)	曹, 芳慧
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100477
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハーディの Wessex 小説におけるキャラクタライゼーション
－文体意匠としての会話部－

曹芳慧（言語文化学・D2）

1. はじめに

Thomas Hardy (1840-1928) は 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけてのイギリスの著名な作家と詩人である. 彼の作品は, 架空の地域 Wessex と呼ばれる設定で，実在する場所（主にイングランド南部と西南部）と絡み合った架空の物語が展開される．Wessex 小説とは，ハーディがこの架空の土地を舞台に描き出した小説のことである．その物語には，ビクトリア朝時代のイングランドの本質が凝縮されている．本研究では，ハーディの Wessex 小説を対象にし，小説会話部の役割とキャラクターライゼーションの関係に焦点を当てる．会話部を対象とした量的研究が示した知見がハーディの文体について新たな洞察を生み出しうるか，本研究では文学研究にあまり応用されていなかった手法を加えて考察を試みる.

従来の研究では，主にナラティブ，特に登場人物の描写を通じて，ハーディのキャラクタライゼーションの特徴が論じられてきた．一方で，本研究では，従来十分に検討されてこなかった会話部に注目し，登場人物の描き分けを明らかにすることを目的とする．具体的には，会話部の言語表現および伝達動詞節を対象に，量的かつ視覚的な分析を行うことで，ハーディが会話部をいかに巧みに用いて人物造形を行っているかを解明する点が，本研究のポイントである.

2. 研究背景

ハーディの Wessex 作品については，これまで様々な解釈や論評が行われてきたが，会話部を通じたキャラクタライゼーションに着目した量的分析はほとんど見られない．しかし，小説の会話部は登場人物の提示と発展において重要な役割を果たしている．Page (1973: 51)によれば，小説の対話（dialogue）は多機能である．筋書きを進めたり，キャラクターを発展させたり，設定や雰囲気を説明したり，道徳上の議論を提示したり，様々な話題についての議論を行なったりするのに対話が役立つ. これらの機能の任意の組み合わせも可能である. 対話のさまざまな機能の中で,「キャラクターの提示と発展 (the presentation and development of character)」が最も重要である.

Wessex 小説の会話部によるキャラクタライゼーションに関する既存の研究では，技術的な制約により，質的分析（主に主観的解釈を伴う）が中心となっている．そのため，質的分析を根拠として裏付ける，より客観的な量的分析の導入が求められている. また, 長編小説を会話部と地の文の二部分にはっきり分けて分析する研究は, 事例数が少ないのが現状である. そこで本研究では，従来の研究とは異なる視点からアプローチを行い，Wessex 小説における文体意匠としての会話部の役割に焦点を当てる.

3. 研究目的

本研究の目的は，デジタル・ヒューマニティーズの手法を活用し，ハーディの Wessex 小説における会話部を抽出・可視化した上で，量的分析によって登場人物の性格描写や人物造形を明らかにすることである．この新たなアプローチにより，ハーディの作品に対する新たな洞察をもたらす可能性を探る.

4. 研究方法

本研究では以下の 3 つのステップで分析を進めた：

① Wessex 小説のコーパス構築

まず，TEI (Text Encoding Initiative)という人文学研究における国際的な標準規格に準拠し，マークアップとアノテーションをテクストに施した．TEI は，主に人文学のテキスト資料をデジタル化する際に利用される標準的なマークアップ言語の一つで，XML (Extensible Markup Language)をベースにしている．TEI でテキストの構造や意味を一貫して記述し，学術研究やデータの保存・共有を容易にすることが可能である．小説を TEI 化したうえで，Python を用いて XML 形式で解

析を行い，ハーディの Wessex 小説 14 冊を対象に会話部を抽出したコーパスを構築した.

② 会話部の可視化

構築した会話部コーパスを基に，登場人物同士の会話をネットワークとして視覚化し，長編小説における話者間の複雑な人間関係を直感的に理解できるようにした．また，会話部をチャット形式で再現する機能を開発し，キャラクター視点を切り替えながら会話を読む体験を可能にすることで，英語小説をより楽しめるインターフェースを提案した.

③ 会話部の分析

まず，登場人物の発話内容そのものに対して感情分析を行う．機械学習により，登場人物の発話における感情が物語の進展とともにどのように変化したかを可視化し，GIS（Geographic Information System）分析と組み合わせることで，主人公の発話感情を Wessex の地理的な文脈に基づいて可視化した．また，話し手の感情や声の調子を示す伝達節に含まれる動詞（伝達動詞）と修飾語（副詞）に注目し，それらがキャラクタライゼーションに与える影響について考察してみた.

5. 結果と考察

5.1 Wessex 小説のコーパス構築

表 1：14 冊の Wessex 小説

	First Published Year	Wessex Novels	Abbreviations	Tokens	Types	TTR	STTR
1	1871	Desperate Remedies	DR	141,388	11,220	0.08	0.46
2	1872	Under the Greenwood Tree	UtGT	57,236	6,981	0.12	0.46
3	1873	A Pair of Blue Eyes	PoBE	130,745	11,328	0.09	0.46
4	1874	Far from the Madding Crowd	FftMC	137,802	12,041	0.09	0.45
5	1876	The Hand of Ethelberta	HoE	141,777	11,525	0.08	0.46
6	1878	The Return of the Native	RotN	142,151	10,769	0.08	0.44
7	1880	The Trumpet-Major	TM	113,626	10,054	0.09	0.46
8	1881	A Laodicean	L	138,846	11,427	0.08	0.46
9	1882	Two on a Tower	ToaT	94,254	9,373	0.10	0.46
10	1886	The Mayor of Casterbridge	MoC	116,321	10,781	0.09	0.45
11	1887	The Woodlanders	W	135,930	11,114	0.08	0.45
12	1891	Tess of the d'Urbervilles	TotD	149,685	12,862	0.09	0.45
13	1895	Jude the Obscure	JtO	145,238	11,355	0.08	0.44
14	1897	The Well-Beloved	WB	62,797	7,373	0.12	0.46

本研究では，TEI に準拠したマークアップとアノテーションをテクストに施し，表 1 の 14 冊の Wessex 小説の会話部コーパスを構築した．Project Gutenberg から 14 の Wessex 作品を入手し，TEI ガイドラインに従ってマークアップを実施した．小説会話部の分析にあたっては，本研究は<said>要素を用いる．<said>タグに@who と@toWhom の 2 つの属性を追加し，それぞれ話し手と聞き手を示す（<said who="#A" toWhom="#B">）．この作業は Close Reading により，つまり，小説の内容を詳細に読み込むことに基づいて行った．TEI タグを使用することで，小説の会話部を本文から明確に区別できるようになった．会話部抽出に関しては，Python で *lxml.etree* パッケージを利用して XML 解析を行った．これで，Hardy 作品の会話データの準備が完了した.

5.2 会話部の可視化

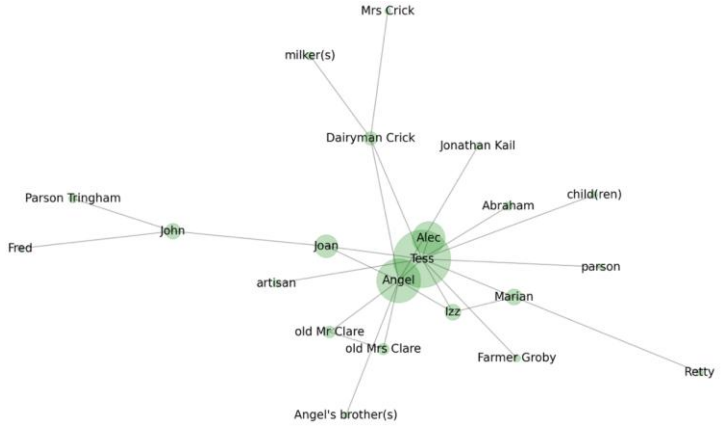

図 1：Wessex 小説会話部のネットワークグラフ可視化結果

図 2：自作アプリによる Wessex 小説会話部のチャット形式可視化結果

5.3 会話部の感情分析

登場人物の発話内容そのものに対して，感情分析と GIS 分析を組み合わせた結果，異なる Wessex 小説の主人公が活動した地理的領域で重複が観察された．また，データを可視化したことで，小説の背景設定や，主人公の感情変動が激しい地域が北へ向かって徐々に移動している現象が明らかになった．このような興味深い現象は，地理的可視化のプロセスを通じて初めて明らかになったものである．

5.4 伝達節の分析

伝達節（Reporting Clause）とは，他者（ここでは小説の登場人物）の発言や思考を伝えるために用いられる節のことである．豊田他(2017: 158)によれば，文字だけでは話し手たちの表情や声の調子がわからず，朗読を収録した CD などの音源がない場合，会話の雰囲気をつかみにくいことがある．そのような会話に「表情」を与える役割を果たすのが伝達節である．本研究では，以下の例文で下線した部分のように，Wessex 小説における伝達節を対象に，伝達動詞とその動詞を修飾する副詞の結びつき，および伝達節とキャラクタライゼーションとの関連性についても掘り下げていく．

<said who="#Owen" toWhom="#Cytherea">'And you don't know him,'</said> said Owen dryly.

表 2：Wessex 小説における伝達節抽出結果

Speaker	Listener	Verb	Adverb
Edward	Cytherea	murmured	-
Edward	Cytherea	-	-
Cytherea	Edward	said	-
Cytherea	Edward	-	-
Cytherea	Edward	said	earnestly
Cytherea	Edward	-	-
Edward	Cytherea	said	-
Edward	Cytherea	-	-
Cytherea	Edward	-	-
Edward	Cytherea	-	-
Edward	Cytherea	-	-
Edward	Cytherea	-	-
Edward	Cytherea	-	-
Edward	Cytherea	said	-
Edward	Cytherea	-	-
Cytherea	Edward	-	-
Edward	Cytherea	-	-
Cytherea	Edward	-	-
Edward	Cytherea	said	tenderly
Edward	Cytherea	-	-
Owen	Cytherea	whispered	-
Cytherea	Owen	-	-
Owen	Cytherea	said	soothingly

6. 今後の展望

以上のように，本研究は，従来の内省的な文学分析にとどまらず，視覚的かつインタラクティブな手法を用いることで，英文学研究をより直感的かつ楽しいものにしている．構築された Wessex 小説のコーパスは，TEI ガイドラインに準拠しているため，長期保存やデータの利活用に優れており，今後のハーディ研究や小説会話部研究，英語教育にも活用可能である．また，視覚化やインタラクティブな体験を通じて，複雑な英語長編小説の理解を助け，文学作品への興味を喚起する効果も期待できる．さらに，感情分析や GIS 可視化を用いた本研究の手法と得られた知見は，文学研究における革新的なアプローチとして，他の文学作品や関連分野への応用可能性を持つ．これにより，ハーディの文学スタイルやテーマに新たな視点を提供し，研究の枠を広げるだけでなく，社会的な応用にもつながる成果を生むことを目指す．

参考文献

Karsdorp, F., Kestemont, M., & Riddell, A. (2021). *Humanities Data Analysis: Case Studies with Python*. Princeton University Press.

Lea, H. (1925). *Thomas Hardy's Wessex* (Pocket ed). Macmillan.

Mohammad, S. and Turney, P. (2013). Crowdsourcing a Word-Emotion Association Lexicon. *Computational Intelligence*, *29*(3), 436-465.

Page, N. (1973). *Speech in the English novel*. London: Longman.

曹芳慧 (2023). 「Hardy 作品における会話部の感情分析」『英語コーパス学会大会予稿集 2023』, 37-42.

Tabata, T. (2004). Differentiation of Idiolects in Fictional Discourse: A Stylo-Statistical Approach to Dickens's Artistry. In Hiltunen, R. and Watanabe, S. (Eds.), *Approaches to Style and Discourse in English*. Osaka: Osaka University Press, 79-106.

豊田昌倫・堀正広・今林修 (2017). 『英語のスタイル―教えるための文体論入門』研究社.